

植調岡山研究センターの紹介

- 新事務所の完成に当たり -

公益財団法人日本植物調節剤研究協会
岡山研究センター

赤澤 昌弘

1. 植調岡山の歴史

植調試験地の略称は「J〇〇」とされており、植調岡山は「J岡山」と表記される。まずは、J岡山の変遷について説明する。

(1) 第Ⅰ期 J岡山

昭和58年4月、中野幸彦氏（元岡山県立農業試験場作物部長）が試験地主任として岡山市福田（現：岡山市南区芳泉）にて開設し、水稻適2試験を行った。陸軍士官学校の出身で、その立ち居振る舞いは常に武士道であった。18年間試験を実施した後、平成13年3月に惜しまれながら勇退され、試験地閉鎖となった。

(2) 第Ⅱ期 J岡山

第Ⅰ期J岡山が閉鎖されてから3年のブランクを経て、平成16年4月、熊代幹夫氏（元岡山県農業総合センター農業試験場化学部主任技術員）が試験地主任として岡山市尾上（現：岡山市北区尾上）にて開設し、水稻適2試験をはじめ、畑作、緑地管理、生育調節剤、GLP作物残留と幅広く試験を行った。忘れてはならないのは、以前は岡山県が一大産地であった「いぐさ」での除草剤適用性試験である。

平成22年4月、諸事情により岡山県を中途退職した私（赤澤）が倉敷市に岡山倉敷試験地を開設し、適1試験を中心に適2、生育調節剤、GLP作物残留の試験を行った。このことで、岡山県では2試験地体制となった。

(3) 第Ⅲ期 J岡山

平成27年4月、岡山試験地と岡山

倉敷試験地を統合し、岡山試験地が存続試験地となった。この統合により職員3人体制となり、多方面に渡る試験を安定して実施できるよう、人員及び施設の拡充を進めることとなった。

(4) 第Ⅳ期 J岡山

平成29年4月、組織改革により「岡山研究センター」となり、現在に至っている。このとき西大寺試験地（岡山市東区升田、古市 清主任）を新設し、適2試験（乾田直播栽培）を中心に実施している。また、平成30年4月からは職員4人体制となっている。

2. 立地

現在の岡山県南部に広がる平坦地はかつて島々に囲まれた「吉備の穴海」と呼ばれる海であった。古くから様々な伝説（古代吉備王国、桃太郎の鬼退治など）があり、関連する史跡も多い。古代から第二次大戦後まで干拓が行われ、現在の岡山平野が形づくられた。

研究センターが立地している地域は古い干拓地であり、地元で歴史に詳しい方の話では「乙巳の変(645年、通称：大化の改新)」の頃に干陸化されたとのことである。地域の水田には条里制(743年の墾田永年私財法)に基づくとされている古代の土地区割り)の名残りが顕著にみられる。

研究センターはJR岡山駅から車で約15～20分、JR桃太郎線の大安寺駅からは約1.6km、JR岡山駅からの路線バスの停留所

(尾上しも)からは約300mである。岡山桃太郎空港や山陽自動車道(岡山ICまたは吉備SAスマートIC)からも近く、まさに「町から近く、交通の便の良い、適度な田舎」という感じである。

3. 事務所新築の経緯と工事概要

平成27年4月の試験地統合に伴い、人員的・業務的に拡大が進み、現行施設では支障が生じるようになった。この問題を解消するため、事務局(当時の佐藤常務、林事務局長)に相談して多くの考えられる選択肢の中から「現敷地内に新築」という方向で了承を得た。

平成29年2月、現行施設の解体工事が始まった。同6月の地鎮祭の後、基礎、鉄骨組み上げ、外装と工事は順調に進み、同10月には建物の全貌が姿を現した。その後、内装、外溝工事が行われ、平成30年1月に完成した(図-1)。

4. 施設の概要

完成した建物は、事務室(図-2)、実験室(図-3、-4)、屋内作業場(図-5)、屋外雨よけ作業場(図-6)、農業倉庫(図-7)から成る。使い勝手



図-1 研究センターの外観



図-2 事務室



図-3 一般実験室

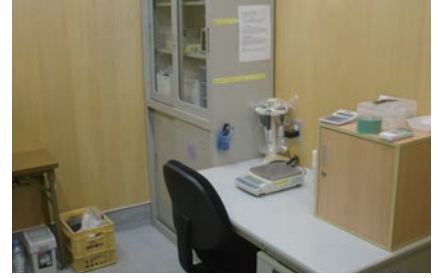


図-4 GLP 実験室



図-5 屋内作業場



図-6 屋外雨よけ作業場



図-7 農業倉庫

を重視し、機能的かつ機動的な総合的施設となった。

5. 西日本豪雨の影響

平成 30 年 7 月豪雨（通称：西日本豪雨）では、7 月 6 日午後から地域全体の農業用水の水位が上昇（図-8）し、翌朝には地域全体が冠水（図-9）した。試験圃場の水深は推定 110cm となり、研究センター建物にも浸水した（図-10、-11）。

地元の方の言い伝えでは「百年に一度大水が来る」と言われていた。また、近くの河川の堤防が決壊したこともあるとのことであった。これら伝承及びこれから発生が想定される南海地震（津波を伴う）に備え、設計段階から基礎を強固かつ高く設置し、万が一に対応できるよう施設配置（事務所は 2 階）や電源設置（電気系統は床面から約 70cm の高さ）を工夫していた。今回の豪雨でも建物 1 階に 10cm 程度浸水したものの大きな被害はなく、事務対応や試験実施も滞ることなく行うことができた。伝説とも言える「百年に一度の大水」が、まさか完成から半年後に来るとは夢にも思っていなかったが、「備えあれば憂いなし」を実感した。



図-8 冠水前日（7月6日）の試験圃場



図-9 冠水当日（7月7日）の地域全体の様子（地元の方による空撮、写真中央：研究センター）

6. 今後の展望

研究センターとなって思いがけず大がかりな拡充・整備が進んでいく中で、各種委託試験の実施は勿論、基礎研究にも積極的に取り組んでいる。加えて、これまで地域の中心となる中核試験地がなかった近畿・中国・四国の中で何ができるのか、できることからコツコツと試行錯誤してはいるが、まだまだ模索の状態が続いている。皆様からご意見・ご要望等いただけると幸甚です。また、お近くにお越しの際には、是非お立ち寄りください。

7. 最後に

第 I 期と第 II 期の岡山試験地及び岡山倉敷試験地の開設には、前近畿中国四国支部長の故富久保男氏の功績が極めて大きく、現在の岡山研究センター



図-10 冠水当日（7月7日）の研究センター



図-11 研究センター前にて（撮影：熊代幹夫氏、中央は筆者）

の礎を築いたと言っても過言ではない。ここに改めて感謝の意を捧げます。

参考文献

岡山県の歴史（山川出版社）
植調五十年誌（公益財団法人日本植物調節剤研究協会）